SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

主体性を引き出し育む英語科授業の開発：英語表現の変化に着目して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻 公開日: 2015-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊勢川, 純子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008456

主体性を引き出し育む英語科授業の開発

―英語表現の変化に着目して―

伊勢川　純子

Developing English Lessons to Foster Student Autonomy :
Changes in Students' English Expression

Junko ISEGAWA

1　問題の所在

これまでの自分の経験を振り返ってみると、生徒が課題に興味関心を示したり、課題に取り組むことに価値を見出したりしたとき、生徒の学びが主体的となり、飛躍的に変化すると感じたことが何度かあった。その一方で、生徒が主体的に学ぶことの大切さをなんとなく感じてはいたものの、飛躍的変化を遂げた生徒個々の英語表現や、その折の生徒の心情を平素と比較して調査したり分析したりすることはなく、あくまで推測の域として捉えていたように思う。

文部科学省は、2002 年、2003 年に、「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想・行動計画」を発表し、21 世紀を生き抜くためには国際共通語である英語のコミュニケーション能力が不可欠であることを表明した。続いて 2013 年、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表し、グローバル化の進展の中で、国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって極めて重要であるとし、アジアの中でトップクラスの英語力を目指すべきだとしている。さらに、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックを見据え、初等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化等、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図るとしている。

教育課程実施状況調査（平成 15 年度実施）によると、ほとんどの生徒が「英語の勉強は大切だ」と考えているにもかかわらず、「英語の勉強は好き」と答える生徒が半数以下で、学年が進むにつれて、さらにその思いが減少する傾向にある。「英語を使おうとする意識」も低い。しかし、小学校外国語活動実施状況調査（平成 24 年度実施）によると、小学生の 76%が「英語の学習が好き」、91.5%が「英語が使えるようになりたい」と回答している。また、中学校 1 年生の 8 割が「小学校の外国語活動で行ったことが、中学校外国語で役立っている」と回答している。小学校に外国語活動が導入され、その成果が実証されている。しかし、研究協力校において実施したアンケートによると、「実際に英語を使いながらコミュニケーションを図る授業」よりも、「丁寧に文法指導される授業」に重きを置く生徒も少なくない。中学校でも、コミュニケーション能力を高める必要性を生徒自身が継続して感じられるように、きめ細やかなアプローチが必要であろう。

国が目指している方向と現状にはギャップがある。生徒を目の前にしたとき、何ができるかと考えたところ、生徒個々がより主体的に学びを展開すれば英語の表現は変化し、「英語の勉強が好き」と答える生徒が増え、さらに国が目指す「英語が使える日本人」に一歩近づけるのではないかとの思いに至った。そのような問題意識のもと、本アクション・リサーチに臨むこととした。

2　研究の目的と方法

本研究の目的は、「主体的な学習者の育成を目指し、英語科としてどのような取り組みができる

のかを明らかにすること」、「主体的な学習を行うことによって、どのような変化が英語表現に表れるのかを明らかにすること」である。生徒が主体的に学ぶようになると、英語の表現がただ単に量的に拡大するだけではなく、表現の多様性につながるのではないかと期待して取り組む。

研究協力校でのアクション・リサーチを中心に、中学校３年生を対象として研究を進める。大学院で学んだ知見を取り入れながら、研究目的に即した実践研究を行う。具体的には、家庭学習に対するアプローチと授業実践を行い、生徒の表現物、発話記録、活動の観察、ワークシート、振り返りアンケート等から学びの様子を分析する。また、校内研修と連携することで、筆者自身の授業の変容だけではなく、研究協力校教員の変容についても、分析、考察することとする。

３　研究の内容

（１）実践研究１　Weekend Journal（週末課題）

通常の単語練習をする家庭学習（Ｅノート）を見直し、「英語力向上を目指して、内容を自分で考えて実施する」という、より生徒が主体的に取り組めるであろう家庭学習を企画、担当した。「主体性」を引き出す手立てとして、「自分で考えて取り組む場の設定」「ツールの呼びかけ、使用ツール記入の義務化」「月１度の振り返り」「ポートフォリオでファイリング」「掲示板コーナーの活用」「肯定的なフィードバック」を行った。

実施途中から、「明確な目標や目的の重要性」を感じ、一部希望者に限り、アメリカのファーマン大学の学生を受け手に設定し、やり取りを通しての表現活動（２学期６回限定）を試みた。

（２）実践研究２　授業実践

「主体性を引き出し育む英語科授業」の手立てを考えるため、３単元の授業実践を行った。

一つ目は、実践研究１の結果から、「修学旅行」は生徒にとって表現したい内容に当たると考え、修学旅行のプレゼンの授業を行った。多くの効果が見られたが、全員が学びの舞台に上がれていないという思いをもったため、二つ目はジグソー法を取り入れたフェアトレードの授業を行った。三つ目に、実践的コミュニケーション能力を意識して、ディベートの授業を行った。手立てによって、主体的な姿の現れ方が変わり、表現にも変化が表れるのではないかと予想を立て、単元構想を１組と２・３組で変えて実施した。授業実践の概要は表１に示す。

表　１　実践研究２　授業実践の概要

授業	教材名	主体性を引き出す手立て	実施月
①	Multi +2 修学旅行 修学旅行の思い出のプレゼン	・トピックは興味関心をひくための「修学旅行」 ・書きたい内容を明確にするマッピングの実施 ・「お助けツール」による学習環境の整備 ・仲間とのグループワーク ・「プレゼン発表会」をゴールに設定	６月
②	Unit 3 Fair Trade Chocolate ジグソー法を取り入れた学習	・やるべきことが明確なジグソー法 ・興味がもてる自作の資料 ・「お助けツール」による学習環境の整備 ・責任感と安心感を与えてくれる仲間の存在	７月
③	Unit 5 Electronic Dictionaries -For or Against? ２回のディベート経験またはジグソー法を取り入れた１回のディベート経験	・「お助けツール」による学習環境の整備 ・責任感と安心感を与えてくれる仲間の存在 ・アウトプットにつながる丁寧なインプット ・２回経験 VS ジグソー法を取り入れた１回経験	10 月

①実践研究２－１修学旅行のプレゼン

実践研究１の５回目の結果、「修学旅行」は生徒にとって表現したい内容に当たると考えた。書きたい思いはあっても、それが表現につながらない生徒の姿も見えてきたので、そのような生徒

を表現につなげ、かつ主体性を発揮できる手立てを表１のように考え、実践研究２－１を実施した。

②実践研究２－２ジグソー法を取り入れたフェアトレード

実践研究２－１では、表現の変化やアンケート等の好結果も得られたが、授業を観察すると、英語が得意でない生徒の有効な手立てとはなっておらず、全員が学びの舞台に上がっていないという思いをもった。何をしたらいいのかがはっきりしていて、仲間と共に課題を解決していくことができるジグソー法を取り入れて、実践研究２－２を実施した。

③実践研究２－３ディベート

これまでの研究で、「主体性を発揮できる場の設定」「学習環境」「仲間の存在」「個に合った支援」の重要性が明らかになった。それらを踏まえた上で、実践的コミュニケーションを意識して授業をデザインした。手立てによって主体性の引き出され方が変わり、英語表現にも変化が見られるだろうと予測した。よって、１組と２・３組の単元構想を変えて実践研究２－３を実施した。

（３）実践研究３　校内研修との連携

当初計画にはなかったが、アクション・リサーチを進める中で必要性を感じたため、校内研修との連携を図った。研究協力校の研究テーマは、「主体的に学び確かな学力が育つ授業」である。しかし、「主体的」な姿を具体的に生徒の姿で共有化できていないと思ったため、校内研修との連携を図り、「主体的」の具体的な捉え直しを行った。その過程は表２に示す。

表２　実践研究３　校内研修との連携を図る実施計画

日時	アクションの内容
１学期末	「主体的な学びの姿」についての記述アンケートを全教員に実施
9月17日 連携１	・「生徒指導提要」を参考に、「主体性」の定義を説明 ・グループワーク①「アンケートに見られる主体性の捉え」の見直し ・グループワーク②担当学年の生徒に当てはめて「主体的な姿」を考え直し
10月１日 連携２	・ジグソー法の説明　・提案授業の説明 ・参観中に行ってほしいこと（主体的な姿のリストを用いて、主体的な姿のカウント）の提示
10月７日 提案授業 連携３	・提案授業（３年３組） ・抽出生徒の姿について意見交換（メンター・メンティーでペア） ・グループごと協議「どの教科でも取り組めそうなこと」→N中の目指す「主体的な姿」
研修部会	以上の話し合いをもとに、研修部で、目指す「主体的な姿」（共通理解）を決定
11月14日 小中合同	・「主体的な姿」を目指しての提案授業（２年生音楽科） ・小中合同の事後研修会

４　実践研究の分析

（１）実践研究１　Weekend Journal（週末課題）

英語表現は、回を進めるごとに量的変化が見られた（表３）。経験と環境が、生徒の主体的な姿を引き出し育むことができる重要なポイントとなることが明らかになった。

表３　実践研究１　Weekend Journal 取組結果（全体）

回数	単語数	文数	取組時間	歌詞のみ	主体的な取組	動詞数	動詞種類数
１回目	48.0語	8.4文	26.1分	18人	26人	8.1語	6.6種
16回目	116.6語	17.2文	38.8分	0人	85人	18.4語	14.6種

どの学力層にも、以上の結果が当てはまるのかを知るため、２年生学年末の成績別で分析した（図１）。どの学力層においても伸び方に違いはあるものの、スタート時と比べると倍以上の伸びを見せた。しかし、英語を得意としない生徒は、長期休みのようなフリーな状態だと力を発揮しにくいということが、データから明らかになった。主体性を求めながらも、個の見取りを行い、それぞれに合ったきめ細やかな支援が必要だということを感じた。

図１　実践研究１　Weekend Journal 取組結果（成績別）

また、実践研究１を進めるにつれ、明確な目標の有無によっても取組に違いが生まれるのではないかとの思いが生じたため、近い将来にやりたいことの有無、将来就きたい職業の有無、またそれらと英語との関係性の有無についてアンケートを実施し、その回答別で分析を行った(図２)。結果は、あると答えた生徒、曖昧な生徒、ないと答えた生徒の順であった。明確な目標の重要性が明らかになったと同時に、目標のない生徒は、英語を得意としない生徒同様、長期休みのようなフリーな状態だと力を発揮しにくいという結果が明らかになった。

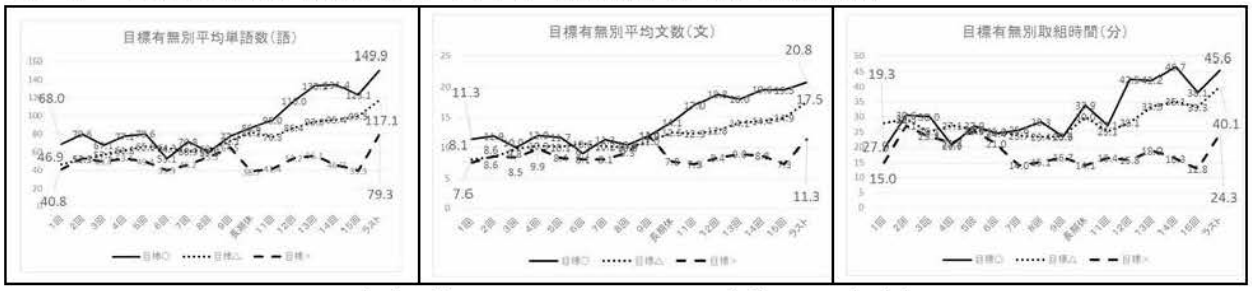

図２　実践研究１　Weekend Journal 取組結果（目標有無別）

目標や目的に加え、必要感や達成感、学習課題の内容等の重要性を感じるようになったため、２学期に入り新たな取組を加えた。希望者に限り Weekend Journal の受け手を設定するという取組である。アメリカのファーマン大学で日本語を学ぶ学生にボランティアを募り、19 名の協力を得て実施した。中学生挑戦者は 25 名である。結果は、単語数、文数、取組時間、すべてにおいて、予想をはるかに上回るものであった。この新しい取組に挑戦した生徒と、通常の取組を継続した生徒の比較を示したグラフを示す（図３)。受け手を設定した９回目から、その伸び率は非常に高く、明確な目標や目的の重要性を、再度明らかにすることができた。学習課題の設定の仕方で、こんなにも表現に変化が生まれるということは、注目すべき点である。

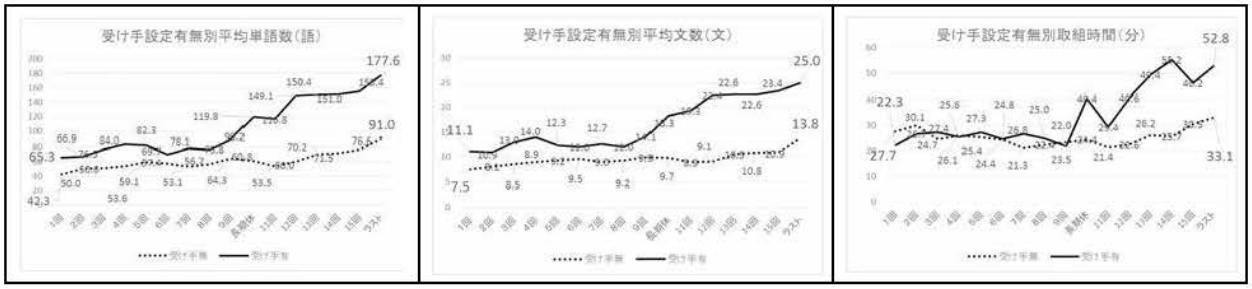

図３　実践研究１　Weekend Journal 取組結果（受け手設定有無別）

（２）実践研究２　授業実践

①実践研究２－１修学旅行のプレゼン

実践研究２－１において、使用している動詞についての分析を行った。比較は、年度の初めに行

った１分間自己紹介で使用した動詞である。表現場面が違うので、単純に比較することはできないが、使用動詞数、使用動詞種類が共に増えている。また、使用している動詞も、1 年次に学習したものに限らず、各学年で習ったものをバランスよく使用している。1 分間自己紹介の際には、既習文法があまり表現に反映されていない印象を受けたが、実践研究２－１では、動名詞や不定詞を用いて、より詳しく動作を説明したり、比較級や最上級を用いて、「いちばん古い」「最も好き」等の説明もしたりしている。また、学習したばかりの受動態や現在完了形を積極的に用いて表現しようとする姿も見られた。

表４　実践研究２－１使用動詞数・種類

項目	値種	１分間自己紹介	実践研究２－１
使用動詞数	平均値	6.5 語	9.5 語
	最大値	14 語	24 語
	最小値	１語	４語
使用動詞種類数	平均値	4.3 種類	7.9 種類
	最大値	７種類	16 種類
	最小値	１種類	３種類

②実践研究２－２ジグソー法を取り入れたフェアトレード

ジグソー法前後において、表現内容に大きな変化が見られた。変化を図４に示す。生徒の表現内容を次の４つのラベル（①見た目・推測②したこと・事実③感じたこと・自分との関連④自分ができること・望むこと）で分類した。

ジグソー法前の表現は、圧倒的に①が多かったが、ジグソー法で学んだ後の表現は、③や④が増え、表現の深まりが見られ、より自分の思いを豊かに表現する方向に変化したことがわかる。

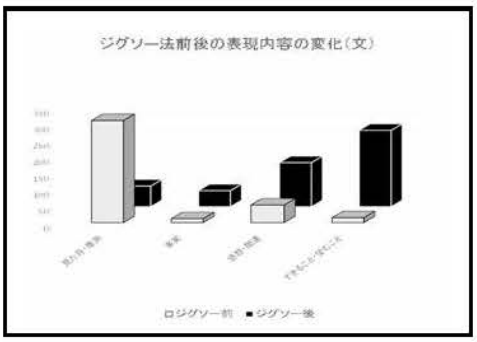

図４　実践研究２－２表現の変化

③実践研究２－３ディベート

手立てにより主体性の現れ方が変わり、その結果として表現にも変化が見られることを明らかにするため、１組と２・３組で単元構想を変えた。ディベートを２回経験する単元を構成した１組よりも、ジグソー法を取り入れて１回だけディベートを経験する単元を構成した２・３組の方が、主体的な取組が引き出され、表現が豊かになると考えた。結果は、予想に反して、どちらの手立てにおいても、主体的な取組が確認できたにもかかわらず、生徒の英語表現には大きな差が見られた。生徒の表現内容を次の４つのラベル（①英語で表現できていない②気持ち・感覚のみの表現③事実のみの表現で根拠が弱い④具体的な表現で根拠が明確である）で分類した。

どの組も量的には同じように表現が増えている。１組は、③の事実のみ・根拠が弱い表現を頂点に、④への到達は組の３分の１程度である。一方、２・３組は、④具体的・根拠が明らかである表現を頂点に、その到達は組の３分の２を占めている。以上の結果から、主体的になったところに、適切なインプットがあることで大きく表現が変化するということが確認できた。

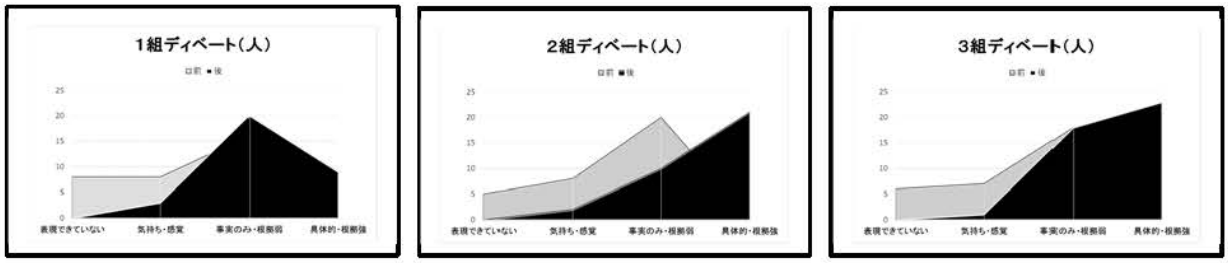

図５　実践研究２－３表現の変化

（３）実践研究３　校内研修との連携

３回の校内研修との連携、提案授業、小中合同研修会を経て、Ｎ中の目指す「主体的な学び」の共通の捉えを形にすることができた。曖昧だった「主体的な姿」が、実際の生徒の姿で捉え直しをしたことにより、その後のメンター・メンティーによる相互授業参観の参観シートには、「生徒が主体的に取り組む手立て」が、より具体的に記述されるようになった。提案授業の際に、抽出生徒の「主体的な学びの姿」を、リストを手掛かりにカウントするという試みを行ったことは、共通の捉えを、より具体的にイメージさせることにつながったと考える。

５　総合考察

（１）「主体性を引き出し育むための英語科授業」のポイント

実践研究の結果から、生徒が主体的になって学びを進めると、生徒の表現は確実に変化するということが実証できた。「主体性を引き出し育む手立て」を考える上で重要だと思うことを、図６にまとめた。

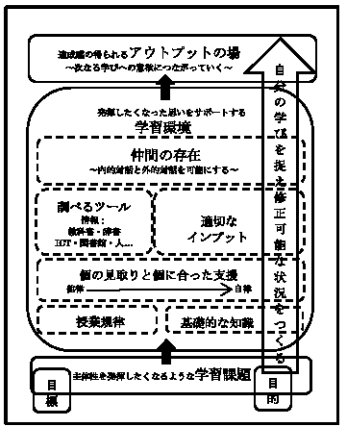

図６実践研究のまとめ

（２）生徒の英語力向上

９月と 12 月に実施された静岡県中学校学力診断調査の表現問題について、結果を比較した。９月実施において県の正答率は 30％だったのに対し、研究協力校では 55％であった。12 月実施において県の正答率は 19％だったのに対し、研究協力校においては 42％であった。どちらも比較すると県正答率をはるかに上回っている。

以上の結果からも、生徒がより主体的に取り組むことによって、生徒の英語表現は変わり、英語の力が向上するということが実証できたと考える。

（３）学び合う学習集団形成を目指して

今回のアクション･リサーチを進める上で､｢仲間の存在｣の大きさをいろいろな場面で感じた。仲間と共に学び合うということについては、以前から注目をしていたが、今回、「内的対話・外的対話」（佐伯，2003）を可能にする「仲間の存在」という新しい視点が確認できたことは、自分にとっては非常に大きなことである。その視点をもって学習形態を考えていくと、単なるグループ活動ではなく、学び合う学習集団となり、どの生徒にとっても、意味ある授業が展開されていくことになる。安心して自分の考えや思い、またわからなさを伝えることができ、そこに相手の考えや思い、わからなさが絡み合っていくことによって、「建設的相互作用」（三宅・白水・益川，2002）がなされ、それぞれが今よりも前に進んでいく、今よりも深まっていくという学びの場を目指していきたい。

６　今後の課題

今回のアクション・リサーチで明らかになった「主体性を引き出し育む手立て」のポイントをさらに追及し、生徒の英語力向上を目指して、日々研修を積んでいきたい。また、「内的対話・外的対話」という新しい視点で、「学び合う学習集団」を捉え、今後、「建設的相互作用」がなされる学びの場を実現していきたい。今回のアクション・リサーチにおいては、「Ｕ字型発達曲線」（Kellerman,1985;Izumi,2013 参照）の第２段階である創造的な言語使用（規則抽出）にまで到達できたと考えるため、今後もう一歩進んで、第３段階である習熟（柔軟な言語使用）を目指し、真なる定着を求めていきたい。そして、「共生」を視野に入れたコミュニケーション能力の育成を目指して、英語教育に邁進していきたい。